

義を1度でよいことになっている。そのためか受講学生百数十人が一堂に満ちて、この時ばかりはマスプロ大学さながらであり、教師稼業の実感が胸にせまる。

地理学巡検は今年のをいれて8回目、2回ほど前からなるべく遠くへ足をのばすよう心がけている。1963年度は中・南九州、1964年度は下北半島をまわった。今年の夏はパンパシフィック・サイエンス・コンGRESSで日がとれず、来春にでもと思って計画中である。卒論題目もこれまでの定式を少しづつはずして、地域の個有のテーマに重点を移すことになったので、指導も本格化しなければならず、成果もヴァリエティに富む様になるだろう。フィールドの担当は庵原山地(静岡)、伊那盆地、松本盆地北部、南部、土器川扇状地(香川)の5カ所であり、相変わらず夏から秋にかけてこれらのフィールドに頻りにでかけることになる。昨年暮に手に入れたトヨベツト・コロナも、ようやく4,000Kmの経験を積んだので、大いに活用したいと思っている。

研究室の主な仕事は、数年来ひきつづいている都市地盤調査に関連した低地の研究であり、研究生や大学院学生の助力を得てすすめている。地図学演習では岡崎助手が細かい技術的指導にあってくれるので、かなりのハード・トレーニングを実行できるようになってきた。空中写真判読器材も最近整ってきており、ステレオトップ、スケッチマスター、パララックスコンバーターも備えられた。蓄積のかなりある空中写真資料を活用する目的で、今年は地理学的判読に必要なステレオグラムを多数作成しようと目論んでいる。そのためアサヒペンタックスの複写装置を設備することにした。(1966年5月29日)

#### ☆ 正井 泰夫

月日のたつのは早いもので、お茶大に専任として勤め出してから、もうすでに2年もたった。非常勤の期間を含めると、2年半経過したことになる。廊下をおそるおそる歩いていた時代は過ぎさって、今では平気な顔をして歩けるようになった。「時が解決する」というのはこういうことかと思ったりする。

最近、「アメリカ地誌」と「都市地理」に重点をおいて研究を進めているが、前者の方は、帰国以来5年半の年月がたった故、もう実感として調査研究をすることが困難になってきた。アメリカに対する印象は、主観的なものさえ、客観的事実となってしまうようなので、皮相的な事象以外については、アメリカの研究をしない方がいいのではないかと時折考えるようになった。

そのようなこともあって、最近の主として「都市地理的」なことに興味の対象を求めている。

「都市地理」でなく「都市地理的」と書いたのは、狭い意味での都市地理でなく、農業・農村・工業・地形・気候・植生などをも含めて総合的な広い研究対象を指向しているからである。

日本の都市は、最近、きわめて急速に変容しつつある。人口都市集中、とくに、東京地域への集中はあまりにも顕著である。武蔵野台地の都市化は、既に東京都の範囲をこえて、埼玉県南部へ急速に伸びている。下総台地 相模原台地などの台地の都市化もまた、きわめて急速である。欧米の都市ではあまり顕著でない沖積地の都市化も急速に発展し、とくに、川崎市や埼玉県南東部で大規模な都市化が進んでいる。

以上のように、洪積台地と沖積低地の都市化は、都市化の普通の形態として見ることができるが最近の大きな特徴として、丘陵地の都市化が考えられる。もちろん、第2次大戦前から、丘陵地や山地山麓部においても都市化が見られた。この傾向は、とくに阪神地域で顕著であった。しかし、現在では、阪神地域はもとより、東京地域においても丘陵地の大規模な都市的開発が進められている。そのうち、とくに有名なのは東京急行田園都市線沿線の「多摩田園都市」開発である。同じ東京急行沿線の開発に、戦前の田園調布地区の開発があるが、今回は、大規模な地形の改変を伴うという点に大きな特徴が見られる。

千里ニュータウンをはじめ、現在開発・計画中の多摩田園都市・多摩ニュータウン・研究学園都市・泉北ニュータウン・高蔵寺ニュータウンなどは、開発する地形条件、都心よりの距離、開発の規模、都市景観などにおいて、戦前のものとは大きく異なっている。

これは欧米先進国が比較的最近経験した巨大な都市化に似ているが、日本のように高人口密度で平坦地が相対的に乏しく、異なった文化遺産をもつ国において、これからどのような都市化を進めるべきかを、われわれは考えてみる必要がある。

## ☆ 貝山久子

就任以来机の場所は変わっても、決して出ることのなかった第2研究室を、最近遂に離れて、勿体なくも渡辺先生と同室に机を置くことになりました。目下のところは第1研究室と第2研究室の両棲動物のようなあんばいです。これは大学院がこの5月から発足して、学生が2人入学し、その機の置場所が必要になったこと、また昨秋から渡辺先生が文教育学部長になられたので、秘書(教務補佐員)という名目で本年卒業の高田和枝さんが研究室勤務になられたために、第2研究室がやや Over population になったからです。本の貸出し、プリント作り、資料の整理、電話、掃除 etc 大いに手伝って頂いて研究室もにぎやかになりました。研究室に籍を置き乍ら研究にあまり熱心でないというのはまことに申訳のないことですし、いろいろ体制のととのったところで、教室の事務やその他の雑用の合間に、少しずつでも勉強をつづけなければと思っています。

不惑の年などといわれる40才にいつの間にかなってしまう、健康診断で血圧を測られて改めて